

見里

集全作名豪文代現



房書出河

里見淳集

現代文豪名作全集

第十九回配本

昭和二十八年十一月二十五日 初版印刷
昭和二十八年十一月三十日 初版發行

定價二八〇圓
地方定價二九〇圓

著者 里見 淳

編集者 村松 定孝

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出 孝雄

印刷者 東京都文京區諏訪町五七
鈴木 才治

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出 書房

電話神田(25)三一七四番

印刷所印刷屋鈴社會資合

目次

河岸のかへり	三
善心悪心	七
晚い初戀	二六
夏　　繪	四八
或る年の初夏に	五九
敗荷圖	八二
椿	一五五
大道無門	一五六
鶴　　龜	二五二

みごとな醜聞……………三四五

初舞臺……………三五六

骨……………三七一

年譜……………三八三

解説……………村松定孝

里見淳集

河岸のかへり

仕入車の梶棒をツツたり版の下に振んで了つて、青筋だつた兩腕をぶらつかせながら、魚金の平公はヒヨスカ駆け続けた。……表通りを直直に、今川橋を渡つて神田にはいり、須田町に差しかゝると、交番の前に人だかりがしてゐた。

「なんでもがせうね」

言ひながら、早くも平公は歩調をゆるめて、貪り喰ふやうに息を入れたが、さて交番のはうを見向くだけの氣力はなかつたし、また別だんさうしたい興味などなく、たゞもう、力のみち溢れる體で、うしろからゲン／＼押してよこす若主人が、うまくこつちの話に釣り込まれて、ちよつとの間でも緩歩いてくれさへすればいいので。

「なんだか、女のやうだぜ」

若大將は、丈の高い、嚴整な體を伸びあがるやうにして、人垣の頭の上から交番前を覗き込んだ。

「へえ、女ですかい。若さんですか？ わッしやアこんなちんちくりんで、皆目様子が知れなげど。……へーえ、

別品ですかね？」

魚金の平公も古い平公で、もう六十いくつだ。子供の頃に思つたのださうだが、その後ふツつり快くつて、自分にはついで覺えのない喘息が再發したらしく、半月ほど前から息切れと咳でひどく悩まされてゐた。——あゝあ、これぢやアまつたくやりきれねえ。さすがの平さんも病にマア勝てませんや、と、あれほどの強情我慢が、主人たちの前でそんな弱音を吐くといふのもよく／＼のこと。それでも、冗談半分のやうなかういふ言葉で、闇に、買出しの役がちつと辛すぎることを諷しながらも、それが年齒のせゐではなくて、偏に喘息のためで、それが堪りさへすればすぐまた前々どほり働ける、といふ意味合で話すことは忘れなかつた。みよりのたよりのまるでない、ひとりツぼつちの平公は、どうでも魚金から葬式を出して貰ふ氣でゐた。

「なんだらう」

嚙喰れ聲で、かう獨言のやうに呟いたが、半長を穿いた若大將の體は、容易にその歩度を緩めないのので、「ねえ、なにもんでもがせう」

「さうさね、なんだかなア」

「拘摸ちやアがアせんかい？」

平公は連續のやうに流れ走る足もとの地べたを見詰めたまゝ、またかう話しかけた。會話の續いてあるかぎりには、それでもいくらかゆつくり行ける。平公は、なんでもかまはない、たゞもう話を仕絶らせない算段ばかりしてゐるの

だ。

「そんな様子でもねえんですかい？」

「さうさねえ……」

「いえね、この節アめつたあるんですぜ。かう、ちよいと見てえと、どこの奥方様かと思ふやうな、どうしてりうとしたこいらへかなんかね、……ええ、うつかり見惚れたりなんぞしてやうもんなら、いつの間にか、チョロツとしてやられてるんだつてえまさア。どうして、女だと言つて油斷がなる世の中ですかい」

「さうだとね。……さ、一ツ走りやるか」

いけねえ、と、平公は肚のなかで舌を打つた。——さうさね、さうだとね、とばかりぢやアまるで話の芽をチョンチョン摘んぢまふやうなもんぢやアねえか。どうしてかうこの節の若いもんは、話ツペたの聞きツペたに出来上つてやアがるんだらう。——さう思ひながらも平公は、押しやられるに任せてヒヨコ／＼駈けてゐなければならなかつた。

それでも、若大將を恨むやうな氣は少しもなかつた。——こしとらの若い時分、もう今の若大將くらゐの年頃にやア、いつぱしの道樂もんだつたが、それから思やア、今時の學校に通つた者は、なんと言つても、しつかりしたところがある。なかでもうちのなんぞと來たら、これはまたちつと堅すぎるくれえだ。忠實で、無口で、……こいつア御難だが、……少々取ツ附きは悪いにしても、至つて溫和で、來年はもう検査だといふのに地情人の一人あるぢやアなし、放蕩

は知らず、ちよほ一なんざア話にも聞いたことがねえくらゐなもんだらう。——かう思つて平公は、豫てから若大將には感心しきつてゐた。——その代り、河岸へ行きア、といふ自負はあつたが、それとて、もう以前の火の出るやうな苛烈しいかけひきは要らなくなつて來てゐる。ずぶの素人でも、買つて買へないことはないやうな、つまらねえ場所になつて了つた。現に若大將一人でも、立派に買ひ出して來る。あめえもんだとは思ひながらも、なんとなく馬鹿に出來ないやうな氣もしてゐた。そのくせ平公は、まだ若大將が生れない以前から、魚金の釜の飯を食つてゐて、何遍かおしつこもかけられたものだ。死んだおかみさんには、眼のなかへ入れても痛くなかつた誠坊の我儘勝手も癖で、平公はその頃から、三人の兄弟のうちで、この、末ツ子の常坊が一番の鼻眞だつた。

たんと急でもない坂を、お茶の水の女學校の前まで登りきつた時には、もう咽喉がヒリつくやうで、意地にも我慢にも足が運べなかつた。恰度、ガラン／＼と授業始めの鈴が鳴つてゐた。永年の功で、行き會つたり追ひ越したりする女生徒の數でも、およそ時間を計ることは出來たが……。これア、ちつとおそくなつたぞ。吉の野郎、もう夙に歸つてゐやがるに違えねえ。——さう思ふと、ぶつ倒れるまでも駈けださなければならぬ。「アヲヨ」とつけ景氣のかけ聲をしてみたが、ひと足ごとに血や肉が絞られて行くかと思はれるばかり、冷たい汗が下垂り落ちて、だん／＼

氣が遠く、いつて行きさうだった……」

「ふ、ふ、ふ、これ、これ」

薄く、つた眉毛を流して、汗は遠慮會得なく目のなかへ流れ込もうとするが、平公は手を舉げて横顔にひっこする元氣もなく、堅くつぶつたま、頻りに首を振る……汗は灰を撒いたやうな往來の砂にホタリ／＼飛散つた。

「いつの間にか、もうすつかり夏ですね」

「あ、」

平公は最後の氣力を會話に注いで、ひと息いれるよりほかに手はないと思つた。

「菊さんとこや、か、か、さんをもちつたて、知つてますか」

「さうだつて」

仕方なく、若大將も少し歩調を緩めた。しめた！と平公は矢張りまゝ立てようとしたが、生憎癢がからんで、備のやうにグルゴロと咽喉を鳴らした。

「さう、なんだつて？」

「ど、そんな具合でせうね」

「さアねえ」

いけねえ、と思ふと、平公はすぐさま新しい絲を手繰り出して、

「仙ちゃんこのは美女だ。あれア貰ひ當てましたね」

「さうだつて」

たうとう若大將もホカ／＼緩歩きだした。

「まつたく、あれだけの器量で……」

「それにお前、氣だてがさ」

「さう／＼、それが何より肝心ですからね。あれでなんですとね、おつとりしてらやうでなか／＼め、はしが利くんですとね」

「たゞ朝がちつとおそつてえこつた」

若大將も、いつもの手とは知りながら、ついうか／＼釣り返されてゐた。

「へーえ、朝寝ですか」

と、さも／＼感に堪へぬやうに、「だが、そいつがよねえな。この、生物商賣でえやつア、朝も暗いに起きて、すべてこの、早いとこ、早いとこいかれとちやつア家でア」

「まつたくね」

「でせう？ なんでもこの、亭主の寝てるまにすつかり度をしといて、ほけ、立つたおまんまを食はせて、河岸イ出してやるやうでなくちやつア、本もんぢやつありせんや。ねえ、さうでがせう？ それを、お前さん、……それ、あのウ、え、と、海さんとこれ、あすこの山の神と来た夢ア……」

今が今までハッハいつて駈けて來た息の下で、すぐから立て續けに喋くるのは、決して樂な藝當ではなかつた。目も眩むばかり眩暈としたあたまで、よしんばその場かぎりの出放題にしろ、相手の心をギユツと引ッぱり留めて置い

て、ちよつとの隙も見せずに、調子よくまくしたててゐる平公は、生來の嗜好きでもあり、話上手でもあつたが、第一さうでもしなければ、所詮もう命が續かないと感じられる苦しまざれだつた。さうかといつて、何十年來瑕瑾なく握りとほして來た仕入車の梶棒は、……これだけは、死んでも擲り出せる代物ではなかつた。

「……なにせえ、あゝして、あれだけのなんだア、店を張つてかうてえに、噤からしてそれぢやア、ねえ、お前さん、第一君えものしめしがつかねえぢやアねえか」

その時平公は、大勢の靴音を聞いた。革臭いやうな、甘酸っぱい匂ひを嗅いだ。それで兵隊の列が、自分たちと摺れ違つて行くことを知つたが、いつのまにか、がツくりと首を垂れて、堅く目をつぶつたまゝ歩いてゐた。

「兵隊さんにしたところでさうでせう。ねえ、士官が眞先に立つて、あゝして、お前さん、ねえ……。だがさ、うちの亡つたおかみさんは、そけえいくと、お世辭ぢやアねえが、まつたくえらかつたねえ……」

それから、小かつた魚金の店の昔日をも語つた。すると、いつのまにか、一生を振り返つて見る老人の愚痴めいた調子もまじつて來さうになつた。が、それと氣がつくや否や、すぐその慘な調子を捨てて、

「だが、今ぢやアもう、なんせてえしたお店になつちまつたもんさ」

と、急にまた景氣づいて、「坂町の御屋敷、北條さん、

ね、奥平さん、水野さん、安田さん、森川町から菊坂、駒込、西片町、眞砂町、でせう？ 丸山福山町、それからづうツと、……まづまア、本郷一ゑん……」

かう油が乗つて來ると、平公はもう咽喉のゼロ／＼も何もとれて了つて、我ながら面白いやうに舌が廻つた、もう一度調子を張つて、

「まづまア、本郷一ゑんと言つてもようがせうね」

「ちつと大袈裟なやうだぜ」

「えツヘムム」

平公はさも可笑しさうに笑つた。

「ときに、あんまりおそくなつちやアいけねえ」

「なアに、もうひとツ走りでさアね」

「アリヤヨ」

若大將は威勢よく大股にピョン／＼と飛んで、その拍子にグイ／＼車を突き出した。

「キタイ」

平公も景氣よくかけ聲を受けると、光澤のいゝ露出の禿頭をやけに振り立てながら、店をさして駈け出した。

「アラ／＼、アラ、ハイ」

さも輕げにピョ／＼と足を蹴あげて、そのくせ、奥のはうへ吸ひ込まれさうな目の玉は、佛像のやうに半眼に閉ぢて、まるで盲滅法に走つた。

「アラ、ライ、ごめんよ／＼！」

（明治四十四年五月 白樺）

善心惡心

てきまきしない昌造の性分では、あれやこれやの對象との間に結ばれた困つた關係が、根を斷たれないで、いつまでもぐつ／＼尾を引いて残つた。さういふ幾條かの尾に纏はられて、彼の生活が次第に息苦しく、随つて活氣も失はれて來た。彼にはそれを可なり切實に感ずることは出来た。悶惱いて、そこから浮びあがらうと希ふ心もそれほど弱くはないつもりだつた。たゞそれを實行にもち來たす意力の點になると、全くだらしがなかつた。こゝに問題は元に潜る。——昌造は若いに似合はず、誠にてきまきしない、前切れい惡い青年である、と。

二十五歳の春、彼は、今度こそいよく今までの生活からサツ／＼蟬脱して了はうと計畫した。第一に始末をつけなければならぬのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも容易く成就されたが、その顛末は茲には省く。次には、もう一人の年上の女、お京との關係だつた。

ところで、彼には、「俺はもうお前がいやになつた」と、面と向つて相手に言ひ切るだけの勇氣は未だなく、さう考へる勇

氣さへもなかつた、……からして、さうは考へなかつた。

相手が自分に對して好意をもつてゐると考へられる間は、誰に限らず、こつちからその人に對して惡意を抱くことの出来にくいのが、彼の性分の一つだつた。而も、その女とは、ともかくも三年越しの關係だつた。そこで、彼がいやで堪らなくなつた「生活」といふもののたかから、その女だけは全く排除されてゐた。實際彼にはその女に對してまだなかく／＼未練もあつたが、それよりも、自分のほうから先に相手が嫌ひになり、随つてまた、その女から薄情者のやうに思はれ、さう記憶されることのはうが更に辛かつた。別れて了つた後までも、女の胸のなかで、懐しい昔の戀人として永く生きてゐたい慾があつた。そこで「生活を一變する」といふ漠然とした考へから發して、女とのこれまでの關係を續けるといふことが、勞また不可能になるといふ結論へと自分を導いたのだ。併し彼は夢にもさう意識的に工らんだ覺えはない。そんな悖德なことを自分の考へとして考へ得るだけの勇氣があるくらゐなら、もつと手ツ取早く事が運ぶ。自分を悖德漢なりと意識することゝを恐れる彼は、その恐れてゐるといふことをも意識に上せないである。かういふ融通の利くあたゝまを必ずしも狡猾と讃めることは出来ない。——それよりももう少し悪い「怯懦」と呼ぶほうが、もつと適切である。だから、彼は自分を、お目出度いほど善い人間だと思つてゐられた、——決してほじく／＼と試みなかつた或る微かな不満足な心持を除け

ば。さうだ、さうして彼は體にお目出度いほど善い人間なのだ。——たゞ、だいぶ卑怯なだけで。そしてまた、ひとのいゝ人間には、多くの場合、大抵かやうな弱點が伴ふのを常とする。

この女と、決して再び會はないつもりで別れて来る、歡ばしがるべき日は、實際彼にとつてずあぶん悲しかつた。房事と飲酒とでひどく衰弱してゐたあたまは、可なり感傷的に傾いてゐたとは言へ、彼は永い闇疊の上に泣き伏して、何年たつたらこの悲みが忘れられるだらうと思つたりした。イゴイストなる彼は、別れて行く自分を潔くするために、同時にまた善良なる彼は、女の幸福のために、それまでに女から立替へて貰つた遊蕩費の二三倍にも當る金を女に贈ることにした。それをもつて女が、ひどい商賣に緊がれてゐる身の自由を購ふことが出来るだけ多く。そのために昌造はかういふ犠牲を拂つた。

四月中旬の埃立つた日だつた。彼は定期預金の證書を懷中にして京橋の銀行へ向つた。この預金は、名義上にも事實上にも彼に屬したものであつたが、彼自身の勞苦とは全く無關係に、祖母から傳はつた遺産の一部だつた。その上、それは實印と共に、堅く母親の保管の下に置かれてあ

つた。その朝、母親の留守中にそつとその證書を取り出し、裏書をして、實印を捺した彼は、いかに自ら辯護しても、懷中してゐるものと、「贓品」といふ意識とを引き離すことは出来なかつた。鉛のやうな罪の感じは胸いつぱいになつて、時々體が微かに顫へるのを覺えた。勿論それは決行する前から當然覺悟されてゐた筈である、——その盗みであることは。それにしても、この胸の暗さは全く豫想外だつた。

「お出しになるのですな」

出納掛の男は彼の顔を見ながら確めた。いま彼の運命の紐が、この生若いへつぱこ行員の手に握られてゐると思ふと、彼は忽ち自分の顔から血の氣の引いて行くのが感じられた。

「さうです」と喰ひ扼つた齒の間から緩かに答へる。暫くして、

「これはと、なんですな」別な行員が停車場の出札口のやうな穴へ顔を差し出して言つた。「これはついでにせんだつて書き變へになつて居りますが」

「はア、期限前だと出せませんのですか」彼はもうそれを證書の儘で返して貰ひたくなる。もうこのうへ恐しい瞬間に堪へきれなくなつて來たのだ。

「いえ、さういふことはありませんが、たゞ利子がだいぶ御損になります、それさへ御承知でしたら、こちらはいつてもよろしいので」

危機の去つたことを感じると、昌造は急に圖々しくなつて、ひと思ひに承知の旨を答へて了つた。度々なく札の束を握つた時にはもう犯罪人らしい自棄くそな度胸が据つて、すぐその足で、女の手へ渡して貰ふ約束になつてゐる友達のうちへ、それを届けた。一時間ほどの後に、彼は十四五の時分から買ひ集めてゐた錦畫を握へて、今度は顔馴染の吉道具屋の店に現はれた。そこで、まるで踏みつけられるやうな想ひを我慢しながら、愛着の深い祝儀の品を二束三文を金に換へた。盗んだ金で義理以上の慈善をなした彼は、まだその上にも、こんな血の出るやうな金を、女やその周囲の者ども（度々彼を陰險な手段で苦しめた者ども）に贈らうとする。それで別れの記念になるやうな品を調へて貰ふことを頼まうとして、また以前の友と、今度は出先に近いミルクホールで落ち合つた。盗んだ金の一文も自分の手には残らず、總ての計畫がひとまづ滞りなく片ついたので、彼の心は今や、落ついてゐた。そして、この大きな犠牲の報酬として、彼は二度と再び言葉も交さない筈の女と、電話で話すだけの釋婦を、自分自身に對して捨てた。そのミルクホールの帳場に近い電話口で、友達が呼びだしてくれた女と、何か、この大きな犠牲の報酬としては甚だ平凡なことを二分間ほど話し合つて、満足して電話を切つた。

前からの約束があつて、友達と別れると、その足ですぐ帝國劇場へ、そこで両親や兄弟たちと一緒にゐるために急

ぐ。或る不愉快な社會劇の幕が明いてゐて、扁平な頭をした時形兒のやうな子役が、彼と同じ名の少年の役を勤めてゐる。この少年に何か悪い遺傳が現はれて來るらしい場面が演じられてゐた。

「昌造さん、あなたはまア……」中高な女優の聲が響く。

——その一日種々な、色の濃い刺戟に悩まされた彼の神經は、哀に瘦せ細つてゐた。恰度聲がはりの時期にある時形兒のやうな少年が、頻りに昌造々々と呼ばれるたびに、彼は腹も立たないで、擦つたいやうな、泣き出したいやうな氣持になつて了つた。やがて、時間を見計らつて家の者に別を告げると、すぐ新橋の停車場へ行き、そこから、逃亡じみた旅にのぼつた。

※

夜汽車のなかの昌造を外的に寫し出すならば、それは悔恨と不安とに身の置き所もなく悩んでゐる青年の、立派な、併しどこか空虚な肖像畫が出來上つて行くだらう。彼は非常な速さで走つてゐる列車の中にあつて、而も刻々追ひ越して來るものがあるやうに感じた。ふと、殺人犯が高飛びをする場合の心理が思はれる。母親の用篋箱に鍵を差し込む時の、^{戰く}胸の、恐しい瞬間を思ひ出す。彼は頭を振つて、立ちあがつて、食堂車へ酒を飲みに行く。その酒が醒めかける時分にまた飲む。——かういふ風に書いて來ると、併し、その次に來るべき、「たうとう彼は、翌朝米原で目を

覺ますまで、なんにも知らずにぐつすりといふ深い眠に就いた」といふ本當の記述が、前半と互にその効果を食ひ合ふやうな形を免れなくなる。併し茲で作者が出會はなければならぬこの矛盾は、そのまゝ作中の主人公へ轉嫁して差支へなからう。彼は體中の筋肉を搾りあげながら心で叫ぶ、「ああ、俺もたうとう泥棒だ!」と。さうして肚のなかで何か呻きながら杯の酒をガブリとあふる。併し次の三分が経たないうちに、彼は今度は冷かな笑ひを浮べる。「不安と悔恨か。筋書通り!」そして酒飲みらしい手つきで肩へもつて行つた杯をちよつと嘗めて味ふ。「お前が今日一日に仕遂げたことを、なぜ杯を舉げて祝ふ氣になつてはいけないんだ! お前は何か悪いことでもしたのか?」更にまた次の三分が経たないうちに、「いくら自ら欺かうとしたつて、良心の聲に耳を塞ぐことは出来まい!」——かくの如くにして、結局どつちが本當の自分の心なのだから、決して彼にはわからなかつた。わからうとして、深く追究しようともしなかつた。作者も亦そのいづれにも與しまゐ。「彼は煩悶する」「彼は安眠する」小説的效果を互に相殺するこの二つの事實も、そのまゝ事實として止め置くより仕方がない。——既にこの小説の冒頭にも述べた通り、彼は少し卑怯なだけで、體に善い人間で、正直であるから。さうして、さういふ型の人間は、二つの全く矛盾した思想や感情に支配されることに馴らされてゐるから。

*

京都には全く違つた春が彼を待つてゐた。着いた日の晩、彼と友達の佐々とが工事中の四條大橋の竹矢來について、御影石の破片がたくさん落ち散つてゐる泥濘に惱みながら、假橋の方へ曲らうとした時に、突然うしろから「オ—イ、昌造主」と聲をかけたのは、大學の制服を着た市村だつた。瘦せてヒョロ／＼とした體が、ダブ／＼な、薄い夏服のなかでピエロオのやうに氣輕で、滑稽で、放埒に見えた。その印象と、旅先で久振りの友達に會つた喜びとで、昌造は急にウキ／＼して來た。京都に住んでゐる市村は彼等をお茶屋へ案内すると言つて自動電話にはいる。昌造は、遊びの興をいろ／＼に豫想しながら、半鐘の梯子に凭りかゝつて待つてゐた。

ほどなく彼等が各自の間に脇息を控へて坐つた、(それと調和するにはみんな瘦せて見すばらし過ぎたから、やゝ荷厄介に持つて扱つてゐたが)茶がかつた庭に面した座敷に、猿のやうに赤い頬をして、髪^{かみ}の仰山な飾にそぐはないボソ／＼とした装の娘が、何か叫びながら飛び込んで來た。これが、昌造の初めて見る舞妓だつた。頬を思ひ切り臙脂で染めて、眉を粗糲に紅で引いた顔の扮りは、遠くから見るによい都踊のこしらへで、髪も同様、たゞ衣装だけが近くで見るによい自前の襟かけの着物に變つたところから起る不調和であることも聞かされたが、當分の間、どうも美しくは見えなかつた。すぐ、やゝ小ぶりで同じものがその隣に來て坐つた。

その晩彼等は、その二階で鰯魚寝をした。その時分には、舞妓の言葉がいくらか昌造にも通じるやうになつたが、彼は故ら選んで市村と同じ布團のなかに寝た。夜中に彼は何かひどく堅いもので頭を打たれて目を覺ました。佐々がひとりりでクツクツと笑つてゐる。折から目を覺ましてゐた彼の口で、初め市村も昌造も自分たちの枕を外してゐたが、そのうち昌造は自分のでなく、市村の枕をして、了つた、すると暫くして、市村も枕をしようとして、いきなり昌造の頭へイヤといふほど自分の頭をぶつけたのだといふことがわかる。一部始終を見てゐた佐々の可笑しさが思ひやられて、彼等も痛い頭を擦りながら長い間笑つた。床の上に伸びあがつて、ほの暗い行燈の火影に舞妓の寝姿を眺めて、「相手があゝいふ趣な男れものでなくつてよかつた」などと言つてまた笑つた。

その翌々晩くらゐには、昌造はもうサツかり舞妓好きになつてゐた。居本の机を前にして彼等は纏まりのないことを話す。寧ろ舞妓たちの新してゐるのを傍聞きする。サイダーのコップのなかを箸でくるく／＼掻き廻してから、玉蟲色に光る小な唇へ持つて行くのを眺める。中で年かきの勝彌が、生意氣にコップ酒など飲んでトロンとなつて、ひとりで喋つてゐた。その様子に、才はじけた一奴が何か適評をした。小な酔ッばらひが聞き咎めて、一人前らしく、ぐツと閉き直つて、「一奴はん、あんたあてをあなづつとあるえなア」その「あなづつとある」の邊で呂律が廻り切れ

なくなる。

「へえ、あなづつてます」一奴は平然として受ける。昌造はなんともいへず嬉しくなつて了ふ。……そこには春雨がシト／＼と降つてゐた。

翌の朝、鰯魚寝の布團の上に市村が起きあがつて、宿酔の脂ぎつた蒼白い顔をして、生矢を噛みながら、帶しろ裸になつて了つた前を搔き合せてゐた。

「まあ、市村はん、帶とつて情のあること」この一奴の言葉に、市村は「こいつ」と言つて立つて捕へに行く眞似をして見せた。彼の隣には、まだもの心もつかないほどの幼小な子が、口をあけてスヤ／＼眠つてゐる。

或晩昌造はひどく酔つて、どうして寝たかも覺えなかつた。ふと目をあくと、雨戸をたててない部屋のかなかに、紫色の美しい曉が靜かに立ち迷つてゐた。寝返りを打つて見ると、一つ布團のなかで、思ひがけなくおそめが寝てゐた。この惻いかな舞妓に、いつからともなく昌造の心は惹かれてゐた。彼は自分の酒臭い息を恥ぢる。おそめの寝顔をつくづく眺めてゐるうちに、いつかそつと小な掌を握る。それは案外にもさう柔ではなかつた。さうしてゐても目を醒し、さうもないので、だん／＼力を入れて行く。だしぬけに、涙ぐましいやうな戀心が起る。もしや、寝てゐると思つたおそめのはうからも、そつと握り返しはしないだらうか、極く微かにでも。さう思つて神經を集中して待つてゐたが、どんな微かな手答もないのに、悲しく、泣きだしたい氣持

で、鼓や太鼓の稽古で堅くなつた掌の平をさすつたりしてゐた。

活動寫眞小屋の椅子に、おそめと小龍とを彼等の間に腰かけさせてゐた時には、たうとう昌造も市村もすつかり勞れ切つて、感傷的になつてゐた。この五六日殆ど晝も夜もぶつづけに一緒にゐて、都踊の花道と見物席とでも、目と目で笑ひ合ふくらゐにまで心やすくなつて了つた可愛らしい舞妓たちが、まるで彼等のもの、悲しい心とは没交渉に、時々何か面白さうに私語を合ひながら、一生懸命活動寫眞ばかり見てゐる。それは當然のことで、それ以上可愛らしいことで、而も彼等の心を苦しめた。それならば、どうしてくれば満足するかと言ふに、それは彼等にもわからなかつたが、たゞなんとなくそれでは物足らなかつた。

そこを出てから、みんなに別れて、彼等は久振りで自分たちばかりになつた。まるで憑物が落ちたやうにボカンとして、なぜかお互ひ同士でうら恥かしいやうな氣持もする。俄にウカ／＼と遊び過として了つたことが、取り返しつかない過失のやうに、他愛もなく心苦しくなる。惡戯をして、先生の叱言が目の前に迫つてゐる小學校の生徒のやうに、肚の底からたよりない氣がする。二人とも黙つて、薄ら寒く曇つた夕方の町をぶら／＼歩いた。

「あゝあゝ」思はず一人が洩した溜息で、相手は噴飯して了ふ。この場合、それがこの上もなく適切な「言葉」のやうに同感されるので。そのまゝまた黙つて歩く。各自いろん

なことを、反芻動物の食物のやうに、ひとつ／＼丁寧に味ひ反してみながら。

彼等の十分でもない小遣は、「男性の callantry (婦人に慇懃なること)」といふ、この遊蕩の間に新らしく出來た、冗談とも本氣ともつかない箴言が繰り返される度ごとに、小間物屋の帳場などへまでも滑つて行つて了つた。昌造は黒谷に住んでゐた友達から歸りの旅費を借りて來たが、市村はまるで豫算が狂つて了つた財布を持つて、それから暫くの間下宿の二階に立て籠るにしては、餘りに「男性の callantry」が發達し過ぎて了つた。たうとう彼は、もう目の前に迫つてゐる試験も顧ずに、昌造と一緒に東京へ歸ることにした。それでも彼等は、東京へ着いたら一文なしになる覺悟で、先に歸つてゐた佐々に、電報で、金を持つて新橋驛に出迎へるといつてやつて置いて、大風な顔をして晝の急行の二等車に納まつた。

彼等の話は舞妓遊びで持ち切つた。おそめや一奴やコッブ酒を飲んだ勝彌などが、代る／＼彼等の話題に上り、同時に眼前に髮髷した。全く覺える氣もなしに聞いてゐたつものの唄の一節などが、どうかしたはずみにヒヨイと口に出た。

「羅の輕き袂に通ふなり」うんぬんといふその年の都踊の立唄を頻りに繰り返す。